

小田原史談

第81号

発行所 小田原史談会
小田原市西栢山3310

相模国初期国府と国分寺の

所在地はどこか

内田 武雄

大化前から此の地方の守について

人皇八代孝元天皇、皇子
彦太忍信命より三代目が武
内宿禰命、其御孫にあたる
宗我都比古命は右五世の孫
なり此御神大和高市郡宗我
郷にて武内宿禰始めて宗我
姓を賜ふ由御孫宗我都比古
命は時の天皇より勅ありて
東夷のしづめとして、此相
模国足柄郡へ下り給ふ御神
当国へ下向ましまし此の里
を開きたまいて、御宮柱太
しきを建て住はせ給う、御
代の内は、東夷のわざわい
なく克く治りて一百年の寿
きを保ち終に神さりました
した。

この神は今の下曾我の宗
我神社として祀られている
が、おそらく大化前のこと
であろう。そのほかに大伴

氏がある。「大日本地名字
書」に大伴と言ひしが淳和
帝の御諱を避けて伴部と改
められし與、而も土俗の習
は猶旧に依り今に大友と言
うに似たり。類聚国史、弘
仁十四年四月改大伴宿禰為
伴宿禰諱也。

又相模国大竟には

一、盛秦の墓

大友村盛秦寺ニアリ大友

黒王の子也

一品大友君公盛秦大僧都

トアリ

慶雲二巳年三月廿六日薨

去

同正八幡宮ノ神体モ同

作、網一色村夷宮盛秦

住云々

「和名抄」の足上郡(群

郷「荒陵寺御手印縁起」

の大伴郷に当ると思われる
が、軍事的氏族として大化
以後も軍事にたずさわる事
が多かった、大伴氏につな
がれたものであろう。上野
国にも大伴部の存在が知ら
れるが、上野国府が想定さ
れる前橋市元郷社にも大友
の地名がある。

東海道坂東の第一国であ

る相模と、東山道山東第一

としての上野とに、それぞ

れ国府付近に大伴部が置か

れていたことは十分考えう

るところである。そのほか

に府中には弓削氏と同族の

矢作部落があり、別所には

同じく穂積氏も物部氏で、

大化以前より、曾我、大伴

物部氏が住んでいた事も明

らかである。

さて、初期相模国府が足

柄平野に置かれたとすれば
その具体的な所在地は何処
に求められるであろうか。
酒匂川東岸の平野部には糸
里制の遺構の方格地割と若
干の坪名が認められ、その
開拓の古いことを示すが、
その東部に三つの台地が島
状に存在し、最も高い中央
の千代の台地上に千代廃寺
の遺跡がある。

この台地上だけでは国府
国分寺とを共に配置するに
十分な広さはないので南
方の高田台地か、北方の永
塚台地に求むべきであろう
どちらの台地にも方格状の
地割りが認められ、各所に
須恵器、土師器などの遺物
を散布しているのだ、それ
れ何らかの古代施設が存
したと思われるが、特に永
塚台地には奈良時代から平
安時代にかけて存在した下
曾我、国府海(こうみ)の
両遺跡があつて注目される

両遺跡は共に永塚台地の東

端にあつて、こみとよば

れる東方の低湿地にのぞむ

位置に所在しているが前者

からは墨書土器、緑釉陶器

の須恵器、土師器を出し

また木簡多数と木札をも出

土しており、官庁跡である

可能性が強い。後者からも

緑釉陶器、灰釉陶器を出土

しており単なる住居跡とは

考えられない。また、前者

からは延暦一五年(七九六

)から弘仁九年(八一八)

にかけての鑄造された「隆

平永宝」の出土によって、

平安初期まで存続したこと

が知られるが、以後廃滅し

たらしい。永塚台地は東部

において、国府海の低湿地

までの比高五メートル、西

部では糸里の方格地割りを

残す低地との高さ約八メー

トルで、西方にやや高いが

台地はほぼ平坦で、糸里と

はややずれる方格地割りを

示し、全面に広く須恵器、

土師器の散布を見る。
木下良氏は一応この地(永塚)に相模国府の存在を想定しておられるが、私はそうは受取りにくい、なぜならば永塚は昔は長墓の郷と言われ次に長塚と言ひ現在では永塚とよんでいるので、地名は墓から出たものと思われる。あるいは、こ

うみの水湖をまわりにめぐ

らした前方後円墳のあつた

所とも思われる。現に私の

あつた永塚の立穴式の

直径四尺ぐらゐの墓二か所

からは、伊豆の山木より出

土したものと全く同じ台付

の甕形土器五、六個、又神

奈川県では初めてと言われ

る土器なども出土している

ので大きな古墳の外がわに

あつたものと思われる。

足柄国府が上下両郡のい

づれかに所屬したかは不明

であるが「和名抄」郷名の

位置から考察すればほぼ郡

界付近にあたる事が判名す

る。

おわりに

以上によって私は相模国

府の所在地は「和名抄」の

高田本郷で国分寺は千代廃

寺であると想定しておりま

す。

これは従来の諸説を批判

しつつ取捨して再編成した

にすぎず、独自のものとし

ては第一期の足柄国府の所

在に付いて具体的な位置と

駅路、駅屋に付いてと、当

時の五衛府(関所)又は総

社、市場などに付いて指定

したにとどまる。しかし、
それが正しいかどうかは此
後の研究にまつものである
う。

史料に付いてはめいめい

に申上げませんが文中の皆

様方のおかげであることを

厚く御礼申し上げます。

—————

あとがき

史談特集号に続いて

会報にのせました。

内田先生の所論はこれ

で終ります。



鎌倉の古寺をたずねて

穂坂 行雄

鎌倉は建久三年(一一九二)より源頼朝の武家政治の中心地。実朝の死で源氏が滅びてからも北条氏が執権として百年も権力をにぎり、北条氏滅亡ののちも足利尊氏が、その子基氏を関東管領として鎌倉府をおき、康正元年(一四五五)足利成氏(しげうじ)が幕府の討手に追われ下総の古河に逃れるまで、三世紀も中心地であった。

いまは、そのおまかげをしのばせる古都として年間二千五百万の人が鎌倉を訪れる。

鎌倉は背後が山で、その山あいの入口の山峡に谷(やつ)とよばれる地形が多い。厨ヶ谷とか比企谷(ひぎ)やつとか歴史に名を残すやつとかが数多い」とは歌人向井樾夫氏のことばであるが、この谷に寺院がつくられており、その向背にやぐら(納骨窟)がみられるやぐらは鎌倉の自然のなかに刻みこまれた中世の遺産である。

また鎌倉は、若き日蓮が法蓮経を説き、弘法の第一歩を印したところで、幕府

の不興を買い、竜口刑場で首を斬られようとした(竜口寺)そのとき奇蹟があったというが、時の執権北条時宗夫人の安産をねがったの赦面(ゆるし)により佐渡へ流された。やがて産まれたのが貞時である。

東慶寺の開基は貞時。尼寺五山のひとつで、正史の上では、初代は時宗夫人覚山尼。

不法な夫に虐待され自殺まで考えるあわれな女性を救済し、三年間当寺に入れて縁切りして身軽自由になれる寺法を、はじめ貞時が勅許を仰いで公認されたという。

縁切寺(駆入寺)といえ、もうひとつ上州新田郡徳川に在る満徳寺も由緒ある縁切寺。新田氏先祖義季公が徳川家の祖とされ、両寺とも徳川家に特別有縁の尼寺としてこの特権を認可されたようである。

近年鎌倉は、山が崩され宅造がすすめられているとさくが、三十段ばかりの石段を昇りきると、静かきなかになく護の寺の屋根が近づいてくる。仏殿にゆく角に、四賀光子の歌碑が立つ

ている。女流文学者の業績をたたえる例の田村俊子賞の受賞式は、毎年この寺で行なわれる。

長谷寺は俗に長谷観音として知られる。浄土宗。弁天窟といつて弘法大師の修業された窟がみられる。本尊の十一面観音は像高九メートル余。金箔は足利尊氏のほどこしたものとわれ柔和なお顔を拝していると近くの大仏さまが美男ならこちらには美女といえうくの字に曲った石段の両側に立ちならぶ大小さまざまの石仏に心はなごむ。

建長寺のある谷はもと地獄谷とよばれ、処刑場であつて、伽藍陀心山平寺という寺があり、当時は地藏堂が残っていたという。本尊が地藏菩薩であるのはこの因縁による。

南北朝時代には、足利氏の外護により鎌倉時代と同様五山の首位にあり、京鎌倉の五山の制がほぼ確立した以後も鎌倉五山の第一位に列せられ近世に及んだ。

園園寺のある谷は薬師堂ヶ谷とよばれる。おおいかぶさる奥深い木立が自然の門を形づくっている。現在山塔は立って、山門跡には庚申塔が立ち、山門跡には木造薬師如来。薬師堂から初ま。北条義時建立。足利尊氏再興すという。そ

の後永仁四年(一二五六)の貞時による園園寺創建となる。寺後の山腹にやぐらが多くみられる。

頼朝が怨霊を慰めるために建てたという大利永福寺跡を左に、道のつき当りが瑞泉寺。関東初代基氏の菩提寺である。ウメが沢山権えられてあり、花の咲く頃は観梅客でにぎわうことだろう。開山は夢想国師で、水仙も多く水仙の寺ともいわれる。寺の背後に夢想国師の坐禅窟があり、夢想国師作成のすくれた庭がある山門に近づく、坐禅についての掲示が眼につく。

宅間谷にあるこの寺は、足利家時(尊氏の祖父)が建てたともいう。山腹のやぐらには足利一族の墓と称せられる五輪塔が二基、三基と並んでいる。

報国寺は関東における足利管領終焉の地であります。と由来記は教えてくれる。

寺後の竹林はよく整理されて、庭はきれいだ。川端康成がこの山あいのしじまの音をこよなく愛したというが、近頃は入場料もとったり、竹林の一隅で茶を喫するとき、心が洗われる思いがするとは言いすぎか。

鎌倉の山は、七百年間、武家興亡の歴史をひだに秘

めて、訪れる人々に何かを語りかける。

(一九七六、九、五)

酒匂鍛冶考

川瀬 春雄

国道一号线に沿った酒匂町の西のはずれを北へ二百メートル程入った所に昔からの村の鎮守酒匂神社がある。この辺の古老の話によると「その昔この神社前の道の両側に鍛冶屋が軒を並べていた。それでこゝを鍛冶村と呼んでいた」と言う。また通称「横町」(よこちよう)と言われてきたこの道と国道へ出たあたりには「先祖は鍛冶であつた」或は「家の裏手から鉄錆の塊が出てくる」と言う家が何軒かある。筆者の家もその内の一軒である。しかしこの酒匂は、一体何時頃の年代にどの様な仕事をしていたのか、土地の古老と言へども今は知る術もなく知る人もない。そしてやがて鍛冶の話も忘れ去られようとしているのが現状である。

筆者はこれについて数年前から一人ひとりに関心をもち初めていた。というのには、わが陋屋の裏の笹藪の中からは不可解な形の鉄滓塊が発見された事と、もう一つ「吾家の先祖は野鍛冶であつた」との言伝へのあつた事である。その関心のポイントとは吾家の先祖は一体どの様な仕事をしていたのかと言ふ疑問であつた。

発見されたこの不可解な鉄滓塊は農具や日用品を打つ一般に言う鍛冶屋から排出されたものでない事は鍛冶に無縁の筆者にも明らかであつた。無縁と言つても大正時代小学生であつた頃、近所の鍛冶の仕事場の前に冬の日などよく立ちつくしたものであつたが、この程度の知識からでもわかることであつた。工作鍛冶の排出物でないとしたら一体どの様な仕事になされたのであろうか興味のある疑問を一層強く持ち初めたのだつた。ところが偶然この疑問を解ききつかけが訪れてきた。昭和四十六年十一月酒匂神社前から昔鍛冶村と呼ばれたこの町の西側裏手を流れる小川の改修工事現場の川底から鍛冶の作業に使用されたと考えられる土甎の円筒が発見したのであつた。しかしそれが鍛

治の作業に使われた吹子羽口(ふいごの火口)の残欠である事を理解し得る迄には五日を要した。それから約五ヶ月家業の合間に工事の泥土を掘り返し続けたその結果、吹子羽口の大型小型の完成品、破損品の十数点、手打の釘、多量の鉄滓塊、それに鍛冶に關係があるのか多数の灯明皿等が採集できた。又その頃酒匂の町に可成の鉄滓が散在している事を知り工事場の遺物採集に平行し、昔の酒匂村の区域について詳細に調査し初めた。ところが之によると意外に広く大量に分布している事が次第にはつきりしてきた。この様にして酒匂鍛冶の疑問点を考え続けている内に気がついた事は酒匂海岸の砂鉄であった。これについても伝承、文献は皆無であるが思い当たることは終戦直後この海岸でしばらくの間、砂鉄の採取作業が行われていた事である。当時の物資の乏しい頃であったので勿論鉄原料としてであったろう。さてこうして不可解な鉄滓塊と鍛冶、海岸の砂鉄の存在と言った事を考えめぐらせてみた時、どうやらこれは鉄の精錬がなされたのではなからうかと素人考えて単純に結論してみたのだった。

の様な方法で鉄を造ったのであろうか。この事について何時全然と言つてよい程の何の知識も持ち合わせなかつた。四十七年当時は鉄の歴史に關するポビュラーな著書は非常に少く漸く入手した立川昭二著「鉄」(学生社刊)をむさぼり読む事によつてある程度の知識を得る事ができた。猶これによると島根県安木市に日立金属株式会社付属の砂鉄精錬(たたら)に關する博物館がある。鉄の歴史に關心を持つ者にとつては是非一見に値すると述べられていた。それから三ヶ月後四月下旬この博物館「和鋼記念館」見学の為慣れぬ一人旅に出た。新幹線の終点だった岡山で伯備線の急行「八雲」に乗換へ、倉敷から高梁川に沿つて中国山脈の分水嶺(このあたりも鉄の産地であった)を越えて、しばらくすると右手に伯耆大山が見えてくる。海岸線に出て米子を過ぎると安木である。鱒すくいでの名の知られたこの町は中海と呼ぶ湖水の様な静かなら海に面している。本通りから横町へ少し足を運ぶと明治時代の面影を残した商家の屋並が見える。落付いた山陰の大都市で、江戸期にはこの地方で産出された鉄の積出港として栄えた所である。

一泊して市役所に隣接した目的の「和鋼記念館」を訪れた。館長住田氏(砂鉄の研究者)の案内で展示物の説明を受け、持参した酒匂出土の資料についての御意見を聴く事が出来たここに展示されている資料は江戸時代中国山地に於ける砂鉄精錬に關するもので今は絶滅した「たたら製鉄」の歴史を物語る貴重な資料ばかりであると言ふ。さ「たたら精錬」とはどの様な事かと言ふと、古くは弥生時代に初まり次第に発達し永い年月を経て、この中国山地に大正十年頃迄続けられてきたもので、江戸時代以降の最も進歩した方法を簡単に述べると、粘土で長さ二、五メートル、幅一、四メートル、深さ一、二メートル、厚さ〇、二メートル程の長方形の風呂桶型の炉を造り両長側面下部から炉の中へ「ふいご」からの強風を送り木炭と砂鉄とを交互に投入を繰返し乍ら赤熱し之を十時間も連続して行つ、こうして砂鉄を熔し、鉄を還元し鋸(げら)と称する粗製の鉄塊を得るのである。この一回の操業に木炭四千貫、砂鉄五千貫を使つて千二百貫程の粗鉄が生産されるのである。

に使われた諸道具、製品の資料、古文書等が展示されていた。この見学で鉄について知識を得る事ができた。と同時に館長住田氏から小田原市内に製鉄技術史を多年研究されている窪田先生が住まわれて居る事を知らされて驚いた。この偶然に恵まれて、それからの筆者のささやかな研究は窪田先生の御指導を受けて大きく元氣づけられる事になった。

年代について
酒匂の鍛冶が何時頃の年代に初まり、そしてやがて隆盛期を迎え、何時頃の年代にその姿を消したのであろうか。これについては新編相模風土記稿の記述以外に今のところ古文書や伝承等何も見当たらない。新編相模風土記稿足柄下郡卷十五の箇所には次の様に記載されている。

酒匂鍛冶分(左可和加知が住んで仕事をした)と言ふ。当時、貞享元禄の頃迄は鍛冶の工人達の生活は、権力者の庇護を受けて域下町等に定着している一部の町々を除いては金屋(かなや)・鋳物師(いものし)などと呼ばれ、重い道具を背負い、砂鉄と木炭と鉄の需要を求めて諸国を遍歴していたと言ふ。こうした鍛冶集

元禄の初年頃から既に百五十年も経過した天保十年頃に書かれたこの数行にしか過ぎない記述の内容からどれだけの信頼性のある筈が出るかわからないが、当時の鍛冶分について考えてみる事も面白いと思う。

先ず元禄の初めに本村である酒匂村より分れて鍛冶分と呼ぶ新村名が誕生したと言ふ。そこにも鍛冶四十二軒余住居せしかば地名となれり。とあるを見れば新村名がついた時点には既に鍛冶の隆盛期を迎へていたものと考えられる。この点については記述もあるもので一応はつきりしているが遡つて酒匂の鍛冶はどの様な姿で、何時始められたであらう。

酒匂神社西隣の旧家山口武男氏の伝承によると「酒匂鍛冶の祖は他国からきた人達で金山さん(鍛冶の守護神)のあつた場所が親方が住んで仕事をした」と言ふ。当時、貞享元禄の頃迄は鍛冶の工人達の生活は、権力者の庇護を受けて域下町等に定着している一部の町々を除いては金屋(かなや)・鋳物師(いものし)などと呼ばれ、重い道具を背負い、砂鉄と木炭と鉄の需要を求めて諸国を遍歴していたと言ふ。こうした鍛冶集

しないが、酒匂の地に荷をおろし守護神である金山さんを祠り、工房を造つて、仕事を初めたと言ふ事である。やがて村の子弟がこの人達から鍛冶の技術を習得し、農耕をしながら鍛冶を営む様になつたものであろう。こうして次第にその数が増加し元禄の隆盛期を迎へたものと考えられる。之迄には少くとも三十年、或いは四十年位の歳月が経過したのではなからうか。この様に元禄年間を中心とした酒匂村に四十数軒もの鍛冶業者が群めき合う程栄へたのはどの位の年月にわたつたのであろうか。はつきりした事はわからないが、余り長い年月の様に思へないそれは当時村の随所に乘られて現在川底や地表に見えがくれする鉄滓の量から推察して五十年、六十年と言つた年月にわたつて栄へたものではない様である。そしてどのような理由があつたか次第に衰退の一途を辿つた様に考えられる。さて次に何時頃の年代迄稼行されたかについては新編相模風土記稿に「今は民戸六十二戸の内鍛冶を業とする者わずか七戸のみなり」とある。風土記の脱稿の時点が天保十二年(一八四一)とすれば其頃既に往時の

隆盛期の姿はく僅かな人々によって農具や日用品等を作る農鍛冶として命脈を保っていた事を伝へている。更に年代が下ってはどうであったか。筆者の祖母(明治四十三年歿)の言に、「先祖は農鍛冶であった」を考えると明治期に入る以前に殆どの鍛冶が其の姿を消していた様である。以上の鍛冶分地域について考察であるが、本村である酒匂村地域の鍛冶についてはどうであったらうか。ここにもおそらく元禄年間前後最盛期であろう相当数の鍛冶が住んでいたことが筆者の調査によって実証されている。鍛冶の技術は「金山さん(親方の鍛冶工房)を中心に次第に酒匂村の個所には鍛冶に關しての記述が全然見当たらない。鍛冶分地域については「七戸のみなり」と僅か七戸について記述しているところから考え

述しているところから考えると、天保十年前後には既に酒匂村地域の鍛冶も殆ど廃業していたのではないかと明治十八年酒匂村(別酒匂鍛冶分合併)の職業別調査を見るに鍛冶業は一戸もない、この頃の鉄器・農具の需要は井細田あたりで満たされたのではないだろうか。この様に鍛冶の始祖からその終末期迄の稼働年数を推定すると約二百年の永い年月となる。その間酒匂の地に鍛冶の火が赤々と燃え活気に充ちた鐘音が高く響き続けた事であろう。それにつけてき金物の町で知られる新潟県三条市や岐阜県関の例をみると昔から今に鍛冶業が栄え続けているのに、これ程盛んであった酒匂の鍛冶が何故絶滅していったのかと首を傾けている研究者があると窪田先生も言っている。 〓つづく〓

随筆

全国に同名「小田原」

が数多くある

額田 喜代春

以上のように、東京と箱根にある二ヶ所の小田原は明らかに江戸時代の初期に相州小田原の人の移民によって出来たのであるが、そ

他の小田原もいずれば何かの理由で、名付けられたものでしょう。では小田原という語源は何かから生れているのか、さぐってみましたら古くから種々の議論があつて

- (1) 小田留木の転字説
- (2) 和戸の原の転音説
- (3) アイヌ語起源説
- (4) 上代田制の遺存説

などいろいろのいわれについて何れも、相当無理な解釈、説明がなされておつて素直に受けとり難く、殊に一般に唱えられて来たのに、小田留木(こゆるぎ)の文字を草書体に書いたのを読み誤ったところから起きたのだという説で、これは

苦言・提言

先日の曾我兄弟の史蹟めぐりは役員諸氏のお骨折りと中野先生の史実に基く解説と相まつて誠に有意義な催しでした。

さて今次の催しで感じた事を些さか述べて戴き度い。会としても種々と事情はある事と思ひますが斯る企画は一般の観光旅行とは異なるものであるから出来得れば以前の史蹟めぐりの様に、バス一台位の人数でじっくりと史蹟を探究した方が適當ではないでしょうか。バス二台の人数では少し多い様に思はれる。当事者としては会員数が殖

「新編相模風土記」足柄下郡巻二の小田原城の項に今も濁綾(ゆるぎ)郡よ此の地の海辺をすべて小餘綾(こゆるぎ)磯と呼べり。小田原の唱も、小田留木(こゆるぎ)の文字を草書体に連書きしてあるのを謬りしより起つたのだ

と、言う説もあつて、いずれにしても小田原の地名の余りにも多いのに驚いたり親しみを感した。

えた為と言はれるかも知れないが、それならば史蹟めぐりの回数を年六回と如何に回数を増やされたら如何に次に会費の件であるが年会費千円と言ふのは今の時代の貨幣価値からみて、少こし廉いのではないかと思はれる。少なくとも現在の倍乃至三倍位に引き上げて、市からの補助等はあてにしないで、充分な活動をされた方が良くと思うが如何。恐らく会員諸氏は会費の多少の値上りは問題にはしないでしょう。

次に六月廿七日の史蹟めぐりに就いての所感。凡そ斯る企画に参加する様な人は、行く先きの土地の史蹟に關する話や、その土地の行事等に多大の関心を抱いているのであるから、同乗するガイドもそれなりの知識を備えた者を乗車させる様、企画される方々はバス会社に要請せられ度い。

例えば先日の場合一号車のガイドの事はいざ知らず小生はたまたま二号車に乗車したのであるが、この車のガイドは沿線の史蹟に關する様な事は勿論ガイドとしての説明らしい事は全然しない様であった。私も数多くバス旅行はしているが先日の様なお粗末なガイドに接したのは初めてである私と同じ考えを持った人がねたと見え「つまらない事計りしゃべっていないで、少しは沿線の名所旧蹟の話だけでもしたらどうか」とガイドに苦言を呈しておつた

次に史談会報に一言、隔月に発行される会報には小生は以前から誤字、当字の多い事に苦々しく思つている。当事者としても発行する以上衆目に触れるのであるから、編集校正には充分念を入れられる様、念のため最近七九号掲載の民話の中で牧歌的が正しいのを林歌的とあり、今翻は今が正しい、応援団とすべき

を応援団となつてゐる。以上小生の感じた事を少し述べてみました。今後も幹部諸氏により充実した史蹟めぐりが企画される事を望み、吾々会員も小田原史談会の発展に尽力致し度いと存じております。

(一会員より)

編集部より

一会員の方より建設的なご意見をいただき恐縮いたしております。ご指摘の編集校正について申し述べますが、先ず原稿をたくさん送ってください。そうすればその中から自由に編集できます。また、いそがしい生活のあい間に暇を見つけてやるのですから、ご期待に副い得なかつたことを深くお詫びいたしますと共に今後一層の努力をいたす所存です。

然し投稿される側について一言いわせていただきますが、投稿される方は「引用文は別として」必ず原稿用紙を用いて、現代国語辞典や漢字辞典を伴侶として当用漢字、新送りがない使用して文章を書いてください。そうすればもっと早く適格に校正ができます。いわゆる現代文で書いてくださるようおねがいいたします。念のために、新聞記事が現代文です。(文責種坂)